

会報 けやき会 2019

埼玉大学教養学部同窓会だより Vol.17



ホームカミングデー小松氏講演会



埼玉大学マスコットキャラクター「メリンちゃん」



図書館



ホームカミングデー懇親会



ホームカミングデー



けやき会総会（講演会）

会長あいさつ
埼玉大学創立 70周年に当たって
けやき会会長 岡田道程

1949年（昭和24年）に開学した埼玉大学は、今年で創立70周年の記念の年を迎えます。この時、旧制浦和高等学校（大正10年）を母体に出たのが文理学部、埼玉師範学校（前身は明治6年）、埼玉青年師範学校（前身は大正11年）を母体としたのが教育学部で、当初、埼玉大学は文理学部と教育学部の2学部でスタートしました。

文理学部は、18回まで続いた後、学部再編で、1965年（昭和40年）から教養学部、経済学部、理工学部（1976年より理学部、工学部）に分かれて今日に至っています。教養学部の定員は当時100名で、2年次から在学学生は、当初4課程（総合文化、現代文化、日本文化、地域文化）、1970年（昭和45年）からは13のコース（日本文化、中国文化、国際関係論、マスコミ等）に分かれて履修



することになりました。現在の定員は160名、3年次編入学30名を加えると、190名、プラス外国人留学生ですから、定員はほぼ2倍ということになります。なお、コース制から、5専修課程12専攻に変わったのは、2004年（平成16年）です。

文理学部の校舎は、北浦和駅前にある現在の県立近代美術館の敷地にあり、下大久保キャンパスに移転が完了したのが、1969年（昭和44年）でした。さらに、大学院である文化科学研究科が出来たのが、1977年（昭和52年）、教養部が廃止になったのは、1995年（平成7年）。そして2004年（平成16年）には、国立大学法人埼玉大学となりました。

教養学部の同窓会は、1991年（平成3年）、最

- (1) 教養学部と協力し、在学生向け寄附講座「経済事情・グローバル時代のキャリア形成」を引き続き実施する。
- (2) ホームページの充実。
- (3) 学部や大学と連携した就職活動支援・同窓生による就職支援・キャリア講座「石澤ゼミ」の後援、協力関係を強める。
- (4) 総会の開催。
- (5) 会報「けやき会」の発行。
- (6) 常任理事会の定期開催（隔月開催）、理事会の開催（年一回開催）。
- (7) 教養学部に対する教育支援。
- (8) 「ホームカミングデー」など大学行事、大学同窓会活動への参画。大学とは同窓会活動への一層の協力を受ける一方、「埼玉大学基金」など大学への協力を強める。
- (9) 同期会、専攻別・地域別同窓会への援助。

18年度けやき会活動計画
(18年度総会第3号議案・抜粋)

18年度役員名簿 (18年度総会第5号議案)		【会長】 岡田道程（教養8、76哲思）	
【副会長】 石田義明（教養7、75国関）		【常任理事】 関根増男（教養1、69文人）	
【理事】 島田 満（教養22、90現社）		稲葉雅美（教養24、92哲思）	
山野清一郎（文理13、65国文）		林野 宏（文理13、65地理）	
赤津光一（教養2、70独文）		井手 博（教養3、71国関）	
河野高須（真澄）		田口美一（教養13、81社シ）	
中嶋広国（教養23、91社シ）		平野友紀（教養26、94現社）	
【監事】 酒井憲太郎（教養2、70日文）		武井中山（尚（教養2、70日文）	

「けやき会」ホームページを見てみよう！
同窓会の情報は、ホームページでもご覧ください。
『埼玉大学 けやき会』で検索できます。

スマホならこちら！

役員役割分担

- ◆会計・庶務 … 関根
- ◆総会・懇親会・講演会 … 吉野、稲葉、中山
- ◆ホームページ … 石原
- ◆会報編集製作 … 岡田、堀江
- ◆寄附講座 … 榎木
- ◆名簿管理 … 萬年
- ◆ホームカミングデー・飯沼

2019年度けやき会総会のお知らせ

2019年6月29日（土）午後2時～

会場：埼玉大学 大学会館 講堂

講演：渡邊欣雄氏（東京都立大学名誉教授・69年教養学部文化人類学コース卒）
演題「風水思想と日本」

講師紹介：長年にわたり、東アジアの思想・宗教の社会人類学的研究に携わる。中でも造詣の深い風水思想の学際的研究にもとづき、日本の景観に現れた風水を豊富な資料とともに解き明かします。

PM 1：30 開場

PM 2：00 講演会（渡邊欣雄氏）※講演会是一般市民にも開放されます。

PM 3：30 けやき会総会

PM 4：15 懇親会（会場：第二食堂職員食堂）
※懇親会会費：5,000円（ただし、現役学生は無料）
※この後、二次会もあります（北浦和界限？）

多くの方の参加、お待ちしております！！

も引きずるくらい、不真面目な学生だった。4年間、バイト・サークル活動（管弦楽団）・麻雀に明け暮れる毎日。大学のバス停を降りると3人待っていて、そのまま拉致され雀荘へ・・・なんていうこともあった。ただ、何故か分らないが、ゼミの先生には可愛がられた。私が世話になったのはマスコミ論の林進先生と社会学の西真平先生。私が3年の時、林先生と、小川博司先生（現・関西大学教授）、当時院生だったY先輩が「音楽の志向に関する意識調査」を企画したことがあった。カセットレコーダーを持って歩く一風変わった対面式の調査を実施したのだが、この時私は調査の責任者を仰せつかった。

調査対象のサンプリングに始まり、調査員の募集と管理、説明会の実施、調査当日の本部運営、調査後のバイト代支払い、調査票集計作業等、多岐にわたる仕事を自分も含めて2、3人でこなしした。社会調査の専門知識については、西先生の実習で得た知識が役に立った。後にこの時の調査を基に一冊の本が刊行される。

さほど苦労することなく、うまい具合に仕事と趣味を両立させてきたと思う。それもいい職場と人間関係に恵まれたからこそであろう。

社会人になって数年経ったある年の春、林先生から突然電話がかかってきた。自宅で見聞をやるから来ないか、とのことだった。西武球場の近くにあるご自宅



「消費社会の広告と音楽・・・イメージ志向の感性文化」（有斐閣選書）である。そんな学生生活も終わりに近づき、卒業に必要な単位はなんとか揃え、就職活動では苦戦しながらも一部上場の印刷会社になんとか引かかる。

に伺ってみると、庭に立派な桜の木があり、テーブルには奥様の手料理が並べられている。満開の桜に美味しい酒と料理・・・実に贅沢な時間だった。参加者は林先生の教え子だが、ほとんど自分より先輩ばかり。高校教師、広告代理店のコピーライター、市議会議員、TV局アナウンサー、自動車会社、百貨店など、職業も様々でみんな個性的。それぞれの道で自己実現をしている人ばかりで、いろんな刺激をいただいた。自分らしく生きるとはどういうことか、改めて考えさせられたように思う。

さて、それなりに充実した社会人生活が、12年目で大きな転機を迎えることになる。不思議なきっかけで知り合った北海道在住の女性と結婚することになったのである。相手は生粋の道産子で北海道以外には住みたくないと言う。当時勤めていた会社には北海道の拠点はなかった。じゃあ、転職するか、ということだ。結果、札幌に本社のある携帯電話の会社から採用通知



北海道・礼文島にて

このまま北海道に永住するものと思っていたのだが、なかなか思う通りにはいかないのが人生。転職先の会社が親会社に吸収・合併され、あつという間に全国区の大企業になってしまった。旭川で2年半、札幌で4

が届いた。

1997年3月、13年勤めた印刷会社を辞め、北海道に渡った。転職・移住・結婚がほぼ同時というダイナミックな変わりようだ。北海道での最初の勤務地は旭川。初めて住む土地で、全く畑違いの仕事に携わるのは、それなりにストレスも大きく苦労したが、毎日が新しい発見の連続で、結構楽しんでいた。

第8回ホームカミングデー開催

2018年10月13日(土)



講演会会場の様子

秋の気配が漂い始めた10月、ホームカミングデーが開催されました。ホームカミングデーは、大学と卒業生・元教職員・地域の皆様など、大学に関係ある方々をつなげるイベントです。8回目の開催となる昨年度は教養学部卒業生で2016年度文化功労者顕彰の小松和彦さんをお迎えし、講演会と懇親会を行いました。



講演後、花束贈呈

子供向けの絵本から絵巻物にいたるまで様々な映像を使って「龍宮城の謎」についてお話を進められまし

昨年10月13日（土）午後、埼玉大学キャンパスにて第8回ホームカミングデーが開催されました。山口宏樹学長の挨拶に始まり、理工学研究科の長田教授により学内に設置されている気象レーダーの紹介に続き、研究発表やスポーツなどの成績優秀学生の表彰が行われました。引き続き行われた講演会では、1970年に教養学部文化人類学コース卒業で、埼玉大学フェローでもある小松和彦氏により数多ある妖怪研究の中から『竜宮城の謎ー絵巻が語る日本人の異界感』と題して1時間余の公演が行われました。

た。ひとつひとつその背景を説明しながら、おとぎ話「浦島太郎」の一コマとして知られている龍宮城が実は「日本人の異界観」を表しているという解説はとてもわかり易く、会場内には全ての人たちを引きつける内容でした。会場に居合わせた教養学部卒業生としてはとても誇らしい気持ちになりました。小松和彦氏は、2016年に文化功労者を顕彰され、現在は国際日本文化センター所長として活躍されています。また懇親会後には、当時の同級生たちとさらに旧交を温めたと聞いています。（下記に「一次会報告」）講演会後に第2食堂で行われた懇親会は、全学部から222名の参加者があり、学長の挨拶に続き、教養学部けやき会の前会長の棚木全学同窓会会長の挨拶、小松和彦氏の挨拶、ホームカミングデー実行委員長の乾杯で始まりました。懇親会のアトラクションでは、モダンジャズ研究会によるライブや華道部による展示もあり、各学部の卒業生たちが同じテーブルを囲みながら、学生時代の思

い出や現在の近況など世代を超えて語り合うなど、正に大学時代を過ごしたホームに帰った一日となりました。なお、2019年度のホームカミングデーは、夏前には日程やイベントなど詳細が発表されますので、ぜひけやき会のホームページにてご確認ください。



懇親会（第2学生食堂）

**2019年の
ホームカミングデーは
10月26日(土)
お待ちしております！**

※ホームカミングデーの詳細は
埼玉大学または、けやき会のホームページをご覧ください。

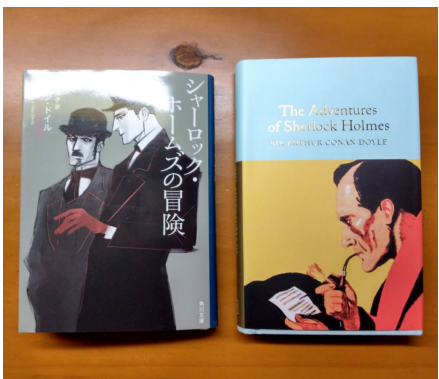
**二次会も
大盛況！**

講演会講師の小松和彦氏は文化人類学コース2期生。学内での懇親会の後は大学から離れて、午後7時ごろから北浦和駅前の『やるき茶屋』で小松氏を囲んで2次会を開きました。文化人類学コース卒業生、大学の先生など15名ほどが参加しました。まずは小松氏の挨拶から始まり、久しぶりの顔合わせなので予定時間を越えて当時の思い出話などで盛り上がりました。



私は現在、ヨーロッパ・アメリカ文化専修課程のヨーロッパ文化専攻に所属しています。私がヨーロッパに興味を持つきっかけとなったのは、映画『ハリー・ポッター』シリーズと、コナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』シリーズです。小学生の頃に『ハリー・ポッター』の映画を初めて見た際、そのファンタジックな世界観はもろろのこ、舞台となっていたロンドンの街並み、特に建築物に魅了されました。『シャーロック・ホームズ』シリーズは中学生の頃から何気なく読んでいました。

しかし、私にとってこのシリーズは、自分のものの見方を変える転機を与えてくれました。大学の図書館にあった、その物語が書かれたヴィクトリア朝時代のロンドンについての文献を読み、当時のロンドンの光と影の部分、つまり、産業



革命によってますます発展を遂げる反面、上流社会と下層社会の差が広がり、飢餓や低賃金労働といった問題が深刻化していた、というのを知り、表向きの社会しか注目していなかった自分の視野の狭さを実感しました。以後、広く世間に知られている出来事や事実を受け入れるだけでなく、その裏に潜む問題に目を向けようと思いついています。

ものごとの背景を注視するという見方は、私が現在学んでいるヨーロッパの芸術と文化の関係を探る上で役立っています。

ヨーロッパ文化専攻では、絵画、文学、建築、音楽、演劇といった芸術作品そのものの価値を分析することに加え、それらから当時の

思想や文化、社会事情を考察することを通じて、ヨーロッパの特性に対する理解を深めることを目指しています。

私は本専攻で扱っている芸術分野のうち、絵画を専門的に研究したいと考えています。絵画は、画家の見た風景や、当時起きた戦争などの様子、高貴な人々の肖像など、現代に生きる人々に「視覚的に」ある一時の過去や歴史を教えてくれるのです。しかしそこから一歩踏み込み、描かれたモチーフに注目すれば、作品が成立した当時の文化を垣間見ることも、画家の人生や思想を知ることできます。言葉で語らない絵画から、そこに描かれたもの以外の事象を探る過程は、私にとってはある種の謎解きであり、楽しみでもあります。



このような絵画の魅力にますます私の探求心は惹きつけられ、美術館に勤める学芸員という夢を持つことにつながりました。学芸員になる道は決して楽ではありませんが、その自分分を高めようという意欲が湧いてきています。

今後は絵画に関する研究を進めることはもちろんのこと、英語やドイツ語の授業を通じて、語学力を磨きたいと考えています。ヨーロッパ文化専攻では語学の講義が充実しているので、近頃は会話やライティングの講義を受講し、少しずつ外国語に対する苦手意識を克服しています。

こうして自分の好きな分野について研究し、将来の目標を見つけることができ、今改めて、教養学部所属してよかったと実感しています。



私は埼玉大学の少林寺拳法部に所属しています。少林寺拳法を始めたのは大学に入学した後からのことで、それまでは武道の経験はありませんでした。



少林寺拳法を始めたきっかけは、私が高校生の頃に読んだ武術に関する本です。その本の後書きで、大学に入学した後に武術を習い、肉体的にも精神的にも成長する、という作者の体験談を読み、自分も大学に入学したら武道を習いたいと思ったためです。

時間がゆっくり流れている感じもあるヨーロッパで、生活面では人間的な生活をするのができた。

ドイツにいた時に経験した一番大きなことは、なんと言ってもベルリンの壁の崩壊だろう。東西ドイツ国境までわずか40キロのところに住み、国境で冷戦の厳しさを目の当たりにしてきたが、ベルリンの壁崩壊という歴史的な大きな出来事に遭遇するとは思わなかった。

ベルリンの壁を初めて見たのは、駐在した翌年のイースター休暇にハンブルクから車でベルリンへ行った時のことである。当時はまだ冷戦の真ただ中であり、ベルリンの壁はその堅固さゆえまだこの先50年も100年も続くであろうと感じられた。それがその2年半後にあっけなく崩れ去ったというのも歴史の事実であり、歴史とは単に書かれた過去の出来事だけではなく、まさに生きているものだと思えた。よい時にドイツに駐在できたことを感謝している。

その翌年日本に帰任し、東京、新潟勤務のあと、今



ワルシャワ旧市街（世界遺産）

そのポーランドは一週間も立たないうちにすぐに好きになった。その理由は何だったのだろうか。日本人とメンタルが似ていることだったかもしれない。西ヨーロッパの人のようにドライで

はなく、日本人に似たウェットな国民性、大の親日国であることも知った。共產主義時代の暗いイメージとは反対にワルシャワの街も人も明るかった。

ここでの5年間にいろいろなことを経験した。仕事では、2本の柱、ODAの仕事と日本企業への支援を中心に行うことになった。また、仕事を離れてポーランドと日本との交流も。

ODAでは、ポーランド製品の輸出支援、最初はポーランドの食品の日本への輸出支援を、そして次にポーランドの家具の対日輸出の支援をした。

また、日本企業への支援については、冷戦が終わり旧共産主義国が市場経済にかじを切ったことにより東欧にビジネスチャンスがあるということ、日本企業が注目を始めた。日本製品の輸出はすでに共産主義時代にも商社を通じて行われていたが、体制転換後は現地への投資に関心が高まった。西ヨーロッパでの生産コストを下げるために東欧に工場をシフトして競争力を高めようという日本企業も多く、ほとんど毎日のようにヨーロッパの日系企業、あるいは日本からの訪問者が訪れて、ポーランドの投資環境についての話を聞きに来た。小生と3年前から駐在していた所員と二人で手分けして、日系企業の訪問者にポーランド事情をレクチャーした。また、ポーランド政府とタイアップして西欧に進出している日系企業にポーランドの投資環境を紹介するため、ジュッセルドルフ、パリ、ロンドンでセミナーを開催した。ポーランドでも見本市参加の仕事が少しあり、広報参加のブースで日本を紹介した。その際、大統領と話をし握手する機会もあった。



VIPの来訪（ポーランド大統領と経済大臣）

ポーランドでは、そのほかワルシャワ日本人学校理事長や日本人会会長なども



ポーランド政府からの感謝状を
駐日ポーランド大使より授与される

海外でいろいろなことを経験する機会に恵まれたので、この経験を若い人に伝えなければという思いがある。5年前からけやき会の寄付講座への講師を頼まれ講師の一人として年1回学生に講義をすることになった。学生に未知の国を紹介すること、国民性の違いや異文化交流、海外で仕事をする際の注意点などについて、自分の体験を踏まえて少しでも伝えることができればと思っている。そして、母校にも少しでもお役にたてるのであればうれしく思う。